

夕日に乾杯！

大阪の中之島は土佐堀川と堂島川に挟まれた中洲で、筆者が勤務する科学館はその中之島のやや西よりにある。二つの川は西へ流れ、ほどなく合流して大阪湾へと注いでいる。やや南向きになっているものだから、冬になると川が合流する向こうに夕陽が傾き、川面がこちらまで一面に金色に染まって見えることがある。そんな日は深い紫に変わってゆく夕暮れの空も美しく、喧騒の大阪にも自然があったことに改めて気づかされる。筆者には短くも、何とも言えぬ幸福感に満たされる時間帯である。それに宵の明星や月でも出ていれば、千両役者の揃い踏みといったところだ。

「夕陽さんさんの会」というグループで夕日にまつわる話をするようになって五、六年になる。夕日はなぜ大きく見えるか、夕日が赤いわけなど、太陽や気象光学現象に関する話をしたのが運のつきで、「たまにはそんな難しい話があった方が後の酒がうまい」という次第で続いてきた。この会、夕日を見るかと思えば、書画の展覧会や清掃奉仕のようなこともやったり、至って真面目な会である。会長の中西先生は九十歳にならんとする御歳だが、頭脳明晰、言語明瞭で、去年はシベリヤの夕日を見てグリーンフラッシュという珍しい現象を捉えたとおおはしゃぎだった。十二月の初め、「ちょっと寒いね」と言いながら皆で夕日を眺めるのが恒例となっている。

気をつけて見るようになると、ちょっとした旅行でも夕日が素晴らしい味付けになることがわかった。日本の最北端の温泉である豊富温泉に行ったことがある。これは天然ガスの採掘時に出てきた温泉だそうで、湯に石油が浮かんでいて何とも強烈な温泉だったが、その後、稚内へ戻る列車から見た夕日はもっと印象的だった。海と喬木の向こうに利尻富士が見え隠れし、そこに日が沈んだかと思うととたんに空が暗転し、自然に包まれるような一体感に震えを覚えるほどだった。この夏は長崎の島原半島の露天風呂から贅沢な眺めを楽しんだ。夕食時だから客は筆者一人だけ。湯船につかりながら天草灘と長崎半島が茜色に染まる情景を堪能した。島原には夕日、これが筆者の島原となった。

きれいな夕日を見るには、相手が自然そのものだけに、多少の努力が必要だ。雨でも曇りでもだめ、少なくとも西空がすっきり晴れてくれなければいけない。天候だけでなく、時刻や方角にも依存する。だが、特別な道具や技術が要るわけではないから至って簡便であり、その割には収穫が多く、実に効率の良い楽しみなのだ。だから、みなさんにもぜひ夕日の鑑賞をお勧めしたい。特に異郷の地へ旅行をされた時など、絶好の機会である。その後のお料理とビールの味が一段と増すこと、請け合いである。そして、できるなら夕日の後、少しの時間を星空鑑賞にもあてて戴きたいと思う。これで完璧、幸せ度は百倍になるはずである。

加藤賢一（日本プラネタリウム協議会理事長、大阪市立科学館）